

2016年2月10日

NPO 法人神戸まちづくり研究所理事長

神戸復興塾

野崎隆一

LET07723@nifty.ne.jp

<復興まちづくり・災害遺構研究会> and <3.11 支援集会>

コメント

「遺構」は辞書によると「過去の人間の活動の痕跡で、固定していて動かすことのできないもの」と説明されています。私の中では、面であれ線であれ、点であれ、「時間の流れに翻弄されながら、様々な偶然の作用で残ってしまったもの」という印象が強いです。

「災害遺構」も一瞬にして起こった事態からの回復（復興）のプロセスで取り残された痕跡と考えています。

東日本で支援に入った気仙沼市鹿折地区における「第十八共徳丸」の問題では、「記憶から消し去りたい」という意見と「被災のシンボル」「新たな集客資源」という意見に分かれましたが、結局は船主の強い意向が働き解体されてしまいました。その議論の中で感じたのは、遺構を創り出そうとする活動への違和感でした。遺構とは、創り出すものではなく、痕跡として発見されるべきものではないか。残すことで遺構をつくり観光の集客に利用するというにはロマンが無い。被災各地で展開されている「遺構」論議も「創り出す」議論ではなく「残された痕跡」を物語とともに発見することではないかと感じていました。

「遺構」に着目して「災害」を伝承していくことの大切さについては、全く異論ありません。今日の議論に参加できなくて申し訳ありません。少し、ひねくれたコメントになりましたが、よろしく願います。

主催：(科研) 基盤 (B) 海外学術調査「復興・防災まちづくりとジェンダー」

共催：神戸復興塾 3.11 支援集会